

# 序論

## 展示の二重性分析の目的と意義

### 1 節 筆者の立場・関心

多くの人々にとって、動物園は、戸外のレクリエーション施設としての位置を保ち続けている。とくに年少の子どもを持つ家族連れには人気がある。博物館法によって、動物園は「博物館施設」に位置づけられるが、一施設当たりの来園者数で比べると、動物園や水族館の来園者は他のどの博物館施設よりも多くなっている。たとえば、国立教育会館社会教育研修所（1994）によれば、種別来館者数の比較表では、動物園・水族館は一施設あたり平均約 80 万人で（登録・相当施設のみ）最も多い。その中でも、石田（1998）の指摘や東京都恩賜上野動物園（1990）の資料が示すように、とくに、幼児や児童を含む親子連れ

の来園者数が全来園者の多くを占め、筆者の勤務する千葉市動物公園の統計（千葉市動物公園（編）、1995）を見ても、都市型動物園の「親子連れ」の来園者割合は全来園者の約8割にのぼる。

筆者は動物園に勤務し、日常的に、来園する幼児や児童、その家族（多くは親）、引率の教師や保育者と接し、展示動物についての解説や展示動物を用いたプログラムの実施に携わることが多い。その中で、子ども達が展示されている動物への声がけやよびかけをしたり、指さしをしながら家族で会話がはずんでいる場面によく出会う。展示動物についての解説をする場合は、展示している側からの「伝えたいこと」「知って欲しいこと」が常にあるわけだが、そのこととは別に、来園者側がそれぞれの見方を持って展示を受け止めていることを常を感じている。展示者側の意図とは独立して、来園者それぞれの「展示観覧体験」が創り出されているのである。

たとえば、一般の家族連れの場合には、来園目的も家族構成もさまざま、動物についての知識を得たいというよりも、自分の中の動物のイメージと実際の展示動物を見比べる（絵本の登場動物を話題にするなどはその例）・動物のしぐさを何かにとえて楽しむ・興味を持つ動物の飼育について知ろうとする・動物一頭一頭の個性を知ろうとするなど、多様な関心を持っている。動物園の今日的ミッション\*<sup>i</sup>であるはずの「野生生物を人々に知ってもらおう」「野生における生態を知ってもらい、野生生物保全に関心を持ってもらう」は、なかなか多くの来園者の直接的な関心事になりにくい。当初、筆者はこうした「動物園側・展示者側の意図や伝えるべきこと」と来園者の求めることとの間のギャップは「何とかして埋められるべき」で、来園者に「方向性のある知的な高まり」のようなことを期待して働きかけるべきだ、と考えていた。つまり、「知識の普及」がまず重要だと考えていたのである。

しかし、多くの来園者とのやりとりを体験し、かつ、来園者の様子を数多く見ているうちに、こうしたギャップが存在すること自身にも価値を見いだすべきではないか、と考えるようになってきた。つまり、園側の伝えたいことと来園者自身が知りたいことのあいだに「ギャップ」を生じさせている「動物園という空間」自身の持つ「場としての価値」である。逆にいえば、動物園という場があるからこそ、互いのギャップを知る機会が生まれるということである。

ギャップそのものについて深く検討し、ギャップをマイナスとして捉えるのではなく、そのギャップの存在に気づこうとする過程で、課題を見いだしていくこと、それが私たち動物園側に課せられていると考えているのである。また、ギャップそれ自体の中に、ヴィゴツキー（1962）の「発達の最近接領域」概念や、エンゲストローム（1999）の「拡張」概念が示すように、個人の発達と社会（個人を取り巻く歴史性を持った他者）の関係の中

に「生まれつつある『学び』」を見いだすこともある\*ii。来園者との日々の具体的やりとりを通じ、動物園側が、来園者の具体的な動物園における展示観覧の体験の意味を知ることとは、この課題設定に結びつくべきだと考えている。

また、博物館全体を学校教育外の学びの場として位置づけようとする最近の動き\*iiiあるいは学校と博物館との連携のとりくみのなかで、「楽しみながら学ぶ」ことへの注目が集まり始めているが、動物園における楽しい学びとはどういうことなのだろうか、といった学びの質を理論的に深めていくことにも関心がある。筆者は、「楽しく学んでもらう」という意味を、かつては学ぶために「楽しさ」を利用する、あるいは「楽しい気分で学ぶのが効果的である」という意味でうけとめていた。しかし、楽しさと学びの関係は、互いに人間として育ちあっていく・理解し合っていく・共同で何かをなしていくという、より対等な人間関係のもとでの、人間や教育に対する深い洞察を必要とするように思われる。人々は、そこで出会って楽しいと思える時を共有しながら、いまだわからない何ものかに向かっていくことの「新たな楽しさ」を体験するのであろう。おそらく、そのようなことを通じて、この「楽しさと学び」の関係は、人々自身がつくり出していくものなのであろう。

染川（1997）は、子どもの博物館のハンズオン展示\*ivを中心とした活動の「何が楽しさをもたらしているのか」との問いに、「その秘密は、子ども達の過ごし方についての注意深い観察と、実際の展示利用についての具体的な状況の把握に努めていることにある」とし、「楽しさ」を創り出そうとする博物館スタッフのが、実際におきていることをよく把握することがキーポイントであると主張する。しかしこの主張は、そうしたスタッフ側が「子ども達をよく知る」ことの重要性を指摘してはいても、楽しさそのものがどううみだされているのかをとらえきれはしない。「楽しさ」には、それまで知らなかったことを知り、新しい世界の広がりを感じるような「楽しさ」もあるだろう。逆に、知らないことがまた増えて、それを知りたいと思うことの中に感じる「楽しさ」もあるだろう。さらには、知ったことを何かの役に立ててその手応えを感じるような楽しさもあるだろうし、集中して何かに取り組むその時間の過ごし方に感じる楽しさもあるに違いない。筆者が、日常的に接する来園者の様子から察するに、強制のない、自由意志によるさまざまな活動にグループ（親子連れや友人同士）で参加し、グループの成員同士の社会的交流、動物園スタッフとの交流など、社会的やりとりが楽しさを感じる要素のひとつであることを実感する。つまり「だれかと過ごす時間の楽しさ」である。また、手足や体を動かして参加する「体験学習」が楽しいと感じるのは、そこに同じ体験を分かち合った「だれか」がいるからである。たとえば、シカゴ植物園での、来園者が「楽しいと感じる時」をインタビューした結果によると、最も多い回答は、「社会的交流(social interaction)」や「思い出づくり」

であったという (Roberts, 1997: p.142)。動物園や水族館、植物園という「自然物」中心の展示であるという特殊性があるにしても、楽しさの本質には、博物館の学び全体に共通する要素、すなわち「誰かと一緒に・同じ時間に・同じものを見たり聞いたりしてする」ことが深く関わっていると予想されるのである。

こうした、社会的交流のもたらす楽しさと「学び」の関係は、最近の「対話」の重視や「共同の学び」、あるいは社会的交通として「知」を捉えるなど、人々同士の間にも生まれる社会的な事実として「学び」や「知」を扱おうとする、認知心理学の傾向とも深く関連すると思われる (たとえば、佐藤, 1999; 佐伯, 1999)\*v。これらの「社会的事実」への注目や、対話による了解や合意を重視する理論は、まさに動物園が、今のところ家族連れの人々の野外レクリエーションの実現の場であるにしても、動物園としての社会的使命を自覚している動物園側の人々が、対話を通じ、新しい価値をつくり出し出している可能性を示唆する理論として有効であろう。人々のあいだの対話は、それぞれの興味や関心を新たに創り出し、ある目的に向かってそれぞれの能力が発揮されていく。筆者は基本的にはこの人間観にたちながら、動物園が向かうべき方向を考えようと思う。動物たちの生の営みを「展示」し、それを来園者が「見る」という仕組みを持った動物園という特殊な博物館施設は、今日、さまざまな意味で転機にあると筆者はとらえている。

具体的には、デカルトに代表される近代の「人間--機械論」を批判したポストモダンの思想が、人間の生産活動の発展に伴い拡がりを見せ、その影響が動物園における動物展示のあり方を考えるべきだ、あるいは動物園の存在そのものを根本から問い直すべきだという意見が台頭してきたことを指している。すなわち、人間と自然の連続性を人間が自覚し、人間以外の生き物たちとの共存に対する倫理感あるいは義務感が芽生え、70年代以降顕著になってきたことと関連する。この動きの端緒は、世界野生生物保護連合 (IUCN) が動物園を「種の保存の役割を果たすべきだ」と位置づけた 1964 年の会議 (ロンドン) に始まる (佐々木, 1977)。現在では、世界の動物園は自主的に「世界動物園保全戦略」を発表し、推定 100 万頭にもものぼる世界の動物園で飼育展示している動物たちをどのようにこの「共存の思想」構築に生かすべきかを提言している。

これらの動物園の歴史的変遷および現代の役割を考えると、やはり利用者 (直接の来園者を含み、広く動物園の存在を考える人々) が現在の動物園施設をどうやって使いながら、共同で野生の生き物たちとの共存の関係を創り出していくことができるのか、そのために動物園自身がどう具体的に努力していくのかという、実践性を重んじる必要があるであろう。

以上のように、筆者自身の日常的体験にもとづく漠然とした問題意識は、さまざまな人

々や理論との出会いによって、動物園における展示をなかだちとした「学び」の実態を、もう少し理論的に見定めるべきであるという課題意識へと変化してきた。そのことにより、内外の関係者と動物園存在の意義や可能性について、ともに深めていけると考えた。それが本研究に取り組もうとした動機である。

以下に、本研究で明らかにしたいこととその研究の意義を示し、それらを探求するための理論的枠組みを述べる。

続いて本研究の具体的目的と方法の概略および本論の全体の構成を述べる。

## 2節 本研究で明らかにしたいこととその意義

多くの家族連れが訪れる、戸外のレクリエーション施設の代表とも言える「動物園」が、「生きている動物を展示する」ことを通じて、「野生動物を理解し、共存を図る」という目的を本当に理解してもらえているのかどうかを知ること、それが一点目である。とくに、最近の展示改革を支える主要な2つのコンセプト、すなわち「生息地再現展示」と「行動学的展示」の影響が典型的に見られる「類人猿展示」においてその展示意図の伝わり具合を知る。

そして、最多の来園者層である「幼児を含む家族連れ」が、お互いに展示観覧において、どのようなコミュニケーションをとり、その具体的な展開に、展示動物あるいは展示の構成要素がどのような役割を果たしているのかを知ること、それが二点目である。

また、これらの家族連れ相互のコミュニケーションには、成員間の年齢差が効いているのではないかと予想し、実験によってそれを確かめること、これが三点目である。このことにより、具体的なコミュニケーションの成り立ちに、動物展示の諸要素に加えて、年齢差のもたらす影響を知る。

最後に、動物展示は、しばしば「展示解説」に携わる「人（解説員）」が介在して、その展示利用の促進を図る場合があることから、一点目の来園者による動物展示の意図伝達に、これら解説者がどう関わることができるのかを知る。これが四点目である。

これらの諸点を明らかにすることを通じて、筆者は、動物園展示者側として、幼児を含む家族連れ来園者の展示観覧体験を理解し、今後の展示法あるいは展示解説のありかたへの示唆を得たいと考える。端的に言うなら、展示者側の展示意図伝達の検証（一点目）と、家族連れ来園者の展示をなかだちとしたコミュニケーションの分析（二点目・三点目）によって、今後の展示法と展示解説のありかたを考える（四点目）ことである。そしてとくに、この四点目に関しては、動物展示を利用する来園者の「展示観覧体験」を知る・理解

するための新しい枠組みについても展望を示し、もって、来園者の主体的な展示利用を支援する観点を提示したい。このことは、一方で博物館全般の展示を含む来館者の「博物館体験」理解という研究領域の進歩に貢献し、他方、社会における多様な「学び」の諸相を捉える試みにも貢献すると考える。これらが本研究の意義となる。

### 3節 理論的枠組み

先行研究としてよりどころとした理論的枠組みは、第一に、展示意図伝達の検証と、来園者の展示解釈の特徴を理解することを目的とした、「来館者研究・コミュニケーション論」である。ここでは、言語を媒介としたコミュニケーション論と、「学習」の具体的展開としてコミュニケーションを位置づける、社会構成主義による学習理論も用いる。

第二に、具体的調査対象とした「類人猿展示」の手法に影響を与えた、展示法改革の思想的系譜である。この系譜こそ、今日の動物展示の本来の意図を示すものとなる。

#### 3-1 博物館展示をとらえるふたつの観点とその理論：展示意図伝達と展示解釈

##### 1) 展示意図の伝達という観点

博物館は、「もの」を収集し、保存し、研究し、そして展示する場であるとされる。展示すなわち「誰かに見せる」という機能を除いてしまえば、収蔵庫であり研究機関となる。ユネスコの定義では、「文化価値を有する一群の物品ならびに標本を維持・研究かつ拡充すること、特にこれらが大衆の娯楽と教育のために展示することを目的とし、、、」\*viとされ、ICOMの定義では、「博物館とは、社会とその発展に寄与することを目的として、広く市民に解放された営利を目的としない恒久施設であって、研究・教育・レクリエーションに供するために、人類とその環境に関する有形の物象を収集し、保存し、調査し、資料としての利用に供し、展示を行うものをいう」\*viiとされている。このように、「もの」の公衆への展示という目的的行為が、博物館を博物館たらしめる機能を支えている。

そして展示法は、展示目的を実現するためのより具体的な展示意図が、見ている人々に明確に届けられるようにさまざまに工夫されてきた。展示物を選び、人々の理解の助けとなるような解説を文字や映像、図などを駆使して展示空間の有効利用をはかる、それが効果的に展示を見る人に届けられること、その目的を達することが展示する側に求められたのである。第1章に述べるように、グラフィック技術の利用などの個別デザインから、展

示室全体を見渡せる立体的な展示空間建築にいたるまで、その工夫とは、文字をじっくり読まなくても、あるいは短時間でも展示意図が伝わるためになされた。それらは主として「視覚」重視の展示構成であり、「見ること」すなわち「知識・情報伝達」という図式で描かれ、一方向的伝達手段として展示をおいていた。

最近の展示企画の考え方でも、一般的には「『博物館資料』を『ある意図』に基づいて館の利用者に『展示資料』として提示すること」とされ（大堀，1997：p.102）、「ある意図」が明確に伝わるような展示資料配置、概念図を含むキャプションのわかりやすさなどが重視される（川嶋-ベルトラン，2000）\*viii。後に述べるように、展示物自体やモデル図、文字を中心としたキャプション（解説）などの展示構成要素の組み合わせや空間配置のしかたは、通常「展示デザイン」として位置づけられ、展示者側の伝達したい情報やことがらを、効率的に伝えようとする場合の主要なツール（道具）とされてきた。

この点に関して、茂呂（1999）は、「道具によって人間は対象世界を自己のコントロールの下に置く。同様に心理的道具によって、私たちは他者そして自己の心を統御するのである。心理的道具は実在の対象物である。以下に示されるような実在物が心理的道具のリストをつくる。」としたヴィゴツキーを引用し（前出：p.23-24）\*ix、言語、記数法や計算のさまざまな形式、記憶術のための諸工夫、代数記号、芸術作品、文字、図式、図表、地図、設計図、そしてあらゆる種類の記号などを心理的道具の例としてあげていることを紹介している。「心理的道具すなわち記号は、『人間自身の支配にむけられ内面的活動の手段である』」（同、p.25）。展示意図をどう届けるか、そのためにどう展示を作っていくのか、という発想には、この「心理的道具」の意識的利用に近いものがあると考えられる。

「もの」の展示は、当然ながら、ものの価値を認めた「ひと」が存在し、その「ひと」自身の観点からの表現を出発点とする。表現手段としての「展示」が、より具体的な「相手」を鮮明に意識し、その対象とした人々に、より効果的な手法を講じれば、強固な「価値伝達」として機能するだろう。展示はそのとき、展示者の「表現手段」という側面をはなれ、それ自体が展示を見る人々の内的世界への切り込みの役割をもち、価値意識構築に使用される「道具」に限りなく近くなると筆者は考える。動物園に関して、渡辺（2000）の言う「文化的装置としての機能」という役割はそれを示してる。

## 2) 見る側の展示解釈という観点

しかし、記号や図、ものや作品は、それを「形」「物体」として知覚するだけでは何の意味ももたらさないことも自明である。自分にとっての意味あるものとして「それ」を受

け入れることが可能なのは、その「形」「物体」自体が、その時代の社会と文化において何か指し示す、あるいは象徴する、自分の中にその記号や図が呼応するものが既にあるからなのである。つまり、記号や図、作品が内面的活動の手段＝心理的道具としてとして役立つのは、使う価値があるとわかる、あるいはそう予想できるからなのである。では、なぜすでに「呼応するもの」が存在するのだろうか。それこそ、人間自身が自らの手で創り上げてきた歴史と文化の所産である。ひとびとは、それ以前の心理的道具を駆使しながら、新たな文化を創り出し、道具に新たな役割を付加し、それでまた新しい歴史をきりひらく。ヴィゴツキー自身が「心理的道具」と「行動」との関連をどうみていたかを、茂呂（1999、前出：p.25）は端的に次のように言う。

心理的道具という媒介項は、それを用いる行為の機能を再編する。

行為の再編、すなわち、道具利用により意図的に行動を自ら変化させていくということである。つまり、ものの展示という手法で何かを表現した側の「意図」とは独立に、「展示を見る側のひと」は、展示されている「もの」や文字や記号や図表を、その意図されたことがらを超えて、その「見る側のひと」自身の内的活動に使用する可能性が本質的にあるということである。「道具」の使用は、その新たな価値付けの可能性を含むからである。自分以外の人の手による「展示」を助けとしながら、しかしそれを見る人は「展示」を使いこなして、自分にとっての展示の価値を創り上げる可能性があるのだ。

さらに、エンゲストロームは、ヴィゴツキーの「道具」概念を発展させて「道具体」とよぶ概念を提起している。道具を使用して個人が二者間系において「与えられた課題」を解釈して再構成するという発見を超え、「集団の最近接発達領域」を問題とするよう主張した。また、ひとつの道具だけでなく、相互に関連しあう道具体全体を分析することを提唱し、その分析にあたっては、表面的観察者ではなく大胆な実験的態度で臨むことを提起した（エンゲストローム、前出：p.17-19）。この「集団の最近接発達領域」概念は、時代とともに、人々が展示のどのような側面にどのような価値を見いだすのかが変化していくことを理解していく上で重要な足がかりとなるだろう。つまり、はじめはごく一部の人々の観点からのみ認められたものであっても、違う時代の社会が「かけがえのなさ」を認めれば、そこにその時代の人々に「価値」の共有が認められることとなる。

こうして、「展示者側の伝達したいことの表現」としての展示が、じつは、展示を見る側の「心理的道具」として別のふるまいかたをする可能性を本質的に含むという意味において、「二重性」をもつととらえられる。したがって、展示が本質的に持つ、展示者による『意図の表現』と利用者の『解釈』の二重性を認めたいうえで、両者の関係を明らかにす

ることが求められる。一方に「もの」や「情報」によってある意図を表現しようとする展示者の存在が、他方に展示を使いながら独自の内的世界の構築をしていく人々の存在があり、その関係は、展示者側が展示意図と関連させた展示利用者の学びを知るだけでなく、利用者自身の世界を理解するという枠組みにおいて、展示の役割を知ることによって創られていくものと考えられる。

### 3-2 生きている動物展示の特殊性

それでは、生きている動物の展示の場合についてはどうであろうか？ 動物展示における意図と解釈の二重性はどのような特殊性を持っているのだろうか。

為政者の「生きた動物コレクション」を「権力の象徴表現手段」としてを並べてみせた19世紀までの「動物園」は、たしかに、それを鑑賞した人々の内面・価値意識にさまざまに入り込んだといえる。動物展示とならべて、しばしば「こびと」や「精神病患者」を同じ檻で展示をするということが、少なくとも19世紀まで行われ受け入れられていたという事実(渡辺, 2000)、動物園で「エスノグラフィック展示」として20世紀初頭までアフリカや中国、アメリカインディアンの民族衣装を身につけた人々の一団が紹介(ショーが行われていた)されていた事実(Hoage and Deiss, 1996)などは、まさにその当時の「珍しさ」とそれらを「見る」ことの政治的意図を如実に示すものとも言えるだろう。

だがしかし、「生きている動物の展示」は、動物自身が「生きている」ということによって、見ている人との直接のやりとりを生むという可能性もあったのではないだろうか。つまり、自分自身の「生き物」との連続性の自覚である。人間と動物との連続性を自覚させたのは、19世紀半ばに発表されたダーウィンの「種の起源」をはじめとした、人間と動物の共通の祖先の存在を予想した著作であった。動物たちの、予想もし得ない動き・声・姿、人間に自分の運命をゆだねながらも、毅然と自分の生を営む姿にであったとき、人々の中の「生き物」は、その時代その時代において、人々の奥底に潜む何らかの感情を揺り動かさずにいられなかったろう。西村(2000)のいう、動物の捉え方の両義性(一方ではトーテミズム、他方では科学的観察の対象としての動物)が、そうした感情の源泉であろう。人類の歴史から見れば、動物との共生的な関係の元に生活を送っていた時代はさほど昔でもないのに、近代化は、人々に急激に野生動物との距離をおかせる生活を強いるようになったかつて動物たちは「シンボル」としてあるいは「語りの文化」の中の登場人物として何らかの象徴性を持って人々の生活に入り込んでいた。その文化の源は、Veltre(1996)によれば、遠く紀元前にまでさかのぼることができる。人々の心の奥底には、動物たちとの解きがたい結びつきがあるが故に、その急激な「距離感」は、心の空虚さを助長した

ろう。無意識のうちにそれを取り戻そうとする気持ちが、ある意味では動物園という特殊な場を存続させてきたとも言える。

動物展示は、たしかに、ある展示空間に生きた動物を配置し、その動物を通じてある展示意図を届ける機能を持っていた。つまり、心理的道具としての側面を持ってきた。だが同時に、展示されている「動物」は、「生きている」がゆえに、人々との直接の相互作用や特別な感情をもたらすという特殊性もある。筆者は、この生き物との相互作用性こそは、一面では心理的道具としての展示を、見る側の人々が、多様に使いこなしていける条件になっていると考える。道具自体が「生きている」ということ、それは、人間以外の自然と人間とをいかようにか結びつける可能性を秘めているに違いない。

こうした野生動物との距離感を埋めようとする感覚は、70年代後半以降の主として欧米にみられた動物園の役割への期待にも表れた。動物園は実のところ70年代以前は、自然から野生動物を収奪してきたという点から、自然保護と相容れない場として位置づけられてきた。動物園が「自然保護を使命とする」場であると認められたのは、いかに改革が進んでいるにしても、まだたかだか2~30年というところである (Wallis, 1997)。

野生を感じる場・自然保護の思想の普及の場として、動物園自身のここ20年ほどの具体的な改革を、「展示」に限ってみるならば、主にふたつの展示改革の潮流が認められる。第一に、飼育動物の福祉向上への関心からの飼育・展示環境の整備、第二に、忠実に再現された野生生息地に動物を展示するというものである。第一の目的は、飼育展示動物の福祉を考慮し、その本来の行動再現をめざした行動学的展示であり、とくに野生動物の保全プログラムの関係でまとめられた Robinson (1998) のレビューが参考になる。第二のそれは、展示を見る人々を「野生動物の生息地にいざない、新しい視覚的な体験をしてもらう」というものであり、本研究との関係でみれば、とくに類人猿に関しての、Gold (1997) のレビューが役立つ。要するに、動物園での繁殖や野生復帰を考えればより自然な行動ができるように飼育展示環境を行動重視で整えることが重要であり、来園者への保護の必要性を強く訴えるメッセージ重視という観点からは生息地再現が有効である、という2つの改革路線である。前者は野外の動物行動を観察する研究者から、後者は展示デザイナーから示され、現在は2つの路線は融合して、より来園者へのメッセージ性を強めることが試行されつつある。

これらのコンセプトに基づいた個別の具体的展示意図は、動物との相互作用・感情的やりとりを求める「見る側」にどのように伝わるのだろうか、あるいは、その意図とは独立した「見方」が生まれているのだろうか。その点を確認したい。

さらに筆者は、博物館展示の中でのこの特殊性が、人々を相互に結びつけ、対話の豊かさをもたらす非常に大きな役割を持つと予想する。人間と野生の生物たちとの共存の感覚、

共生的関係の創出にむかう意志は、直接の展示動物から感じ取られることを、人々同士で交換・交流することと深く関連すると考える。

### 3-3 来館者研究におけるコミュニケーション論の展開

以上のように、展示者側の展示意図を伝えるための「展示物とその展示方法の工夫」は、見る側の人々の内面に入り込みながらも、見る側の人々の見方の自由さが別の要素をもたらす可能性がある。とくに、展示物が生きている動物である場合には、さらに、展示動物との感情的交流があるという体験が、展示意図とは独立の自由な見る側の意味付をしていく可能性をさらに広げている、といえる。

博物館研究における見る側の立場を重視した研究は、まだ着手されたばかりであるが、来館者調査(行動観察を中心とした博物館展示観覧の諸特徴をつかむもの) 試みは、実は1920年代にさかのぼることができる(並木, 2000c)。第1章に述べるように、来館者への関心のはじまりは、いかに正しく効率よく「展示意図」が伝達できるかであった。その後、80年代に入り、展示を来館者がどのように受けとめているかという関心は、国際来園者研究所(International Laboratory of Visitor Studies) (略称はILVS)\*xや、来館者研究協会(Visitor Studies Association)\*xiにみられるような、より組織的な来館者行動観察や面接法などを駆使したシステムティックな来館者調査による展示効果の検証へとすすんだが、その後、来館者の日常的な生活状況から博物館訪問体験全体を「理解」しようとする来館者研究も台頭し、今日に至っている。

とくに後者の傾向は、後述するように、ここ10年来のイギリス・レスター大学(博物館研究)のHooper-Greenhill,E.らによる「博物館におけるコミュニケーションモデル」創出過程、あるいはHein, G.らの文化-歴史アプローチによる学習プロセスモデルなどに見ることができる。これらのモデルには、展示物や展示を通じてメッセージがどう効果的に効率よく伝わるか、あるいは伝えることができるかという「知の伝達(啓蒙)」ということへの根本的な問いかけがある。つまり、「知」は一方向的に個人の頭の中に伝達されるものではなく、人々の間に分かち保たれるものであり、それまでの歴史的遺産を引き継ぐだけではなく、あらたな知的活動によって生み出されるもの、あるいは生み出そうとするその方向性を持つことを重視する傾向が生まれてきた事とも関連がある。

これらの傾向は、70年代以降の認知科学の発展、教育学や心理学における「構成主義」や「社会構成主義」の理論構築の影響による\*xii。この理論は、人々が、周囲の「もの」やひとびととの関わりの中で、どのように知的活動を展開していくのか(知的活動が展開するかではなく)を、人々の側から検証していくという性格を持つ。とくに、社会構成主

義の立場からは、人々の学びとは、個人の頭の中の知識の増加ではなく、共同で何ごとかを為していく、あるいは為していこうとするその具体的な主体的活動や指向性に結びついた知的な活動をさすという見方がなされる。人々が、他のひととの関わりの過程で生み出そうとする能動性を「知的活動」とし、そのようにして生み出され、人々の間に分ち保たれたことがらを重視するのである。

しかしながら、この観点から「来館者の知的活動」と「展示を仲立ちとした博物館教育」の関係を見ようとする理論はまだ登場したばかりで、それらの関わり合いを実証的に見ようとする研究は残念ながらまだ多くはない。「実証性」そのものへの懐疑をこの社会構成主義は含んでいる。むしろ、ガーゲンらの主張のように、人々によって「語られること」それ自体を社会構成主義は重視するからである\*xiii。

だが、この立場にたって展示の役割・博物館存在を問い直すようにすれば、「展示する側の論理」と「見る側の論理」を対立させるのではなく、両者の関係の中で実際に生み出されていることを研究対象とする、という視点をもつことが重要である。「展示を見る・利用する」人々の主体的な展示解釈が、展示する側とのどのような関係を作り上げるか、その「解釈」主体の認識のありかたを研究対象とするという、新しい「来館者研究」はこの主体的解釈をも対象とする。

ところで、見る側の独自の展示解釈を視野に入れながら、展示する側と見る側との双方向コミュニケーションの問題を扱おうとするこうした最近の来館者研究の傾向に対して、筆者はそこで使われている「コミュニケーション」が、やはり伝達モデルに未だ封じこめられているのではないかと問題提起した（並木、2000c 前出）。先の Hooper-Greenhill, E. のコミュニケーションモデルでは、見る側の人の展示解釈を参考にしながら、よりよき展示のあり方を考える「展示者側内部（博物館の研究者・展示企画者・デザイナー・保存担当者相互）のコミュニケーション」が重視されていた。しかしそれならば、同等の重みにおいて、見る側の人々相互のコミュニケーションも視野に入れてしかるべきだ。「展示を見る人」は、展示と一対一の関係を持つような、孤立した存在ではない。

それぞれの展示解釈により、新しい意味創出をすれば、見る人自身の内的な過程とその表出（表現）が重視されるべきである。筆者が本研究の対象とする動物園来園者は、その多くが子どもを含む家族連れという点を考えると、家族相互のやりとりにおける展示解釈も含まれる。ここに、筆者は、展示者側と見る側との双方向性コミュニケーションとは別の、展示解釈がおこなわれているまさにそのプロセス自体をとらえる必要を提起したのである。そして、家族が「同じ展示を見る」という事によりどのような社会事実がそこに生まれるのか、一緒に見ることがもたらすその家族にとっての意味の考察まで及ぶような「来館者による展示解釈」も扱われるべきだと考える。

では具体的に、そうした見る側の人々相互のコミュニケーションをどのように捉えることができるだろうか。

じつは、筆者はこれまでに、動物園における来園者の行動を、動物園側からの意図的な働きかけと関連させて把握する際に、言語を主要な要素とした社会的やりとりに注目すべきだと論じ、その具体的方法の一端を紹介した（並木, 1999）。そこでは、生きている動物という「展示物」およびそれらを解説するサイン類（看板や案内板）を媒介として、来園者相互の社会的やりとりそのものが、「その来園者たち」にとって果たす役割や意味を浮き彫りにする重要な研究対象となる可能性を提起した。たとえば、ある母親にとっては、子ども自身が持つ動物への興味の表れ自体を楽しむことが、動物園来園の目的のひとつになっている（並木, 2001a）。

ただし、この社会的やりとりは、動物園という屋外のオープンな展示に特有の特徴である可能性はある。たとえば、美術館や文書館は、基本的に私語は慎むべき空間である。互いに同じものを見ながら、自分の感じたことや疑問に思うことを「発話」という形で表現し、情報を交換しあえるのは、他の来訪者への気遣いをさほど必要としない屋外展示が多いからでもあろう。

その意味で、展示前での言語による社会的やりとりを重視すべきであるという筆者の考え方は、博物館全般に及ぶのではなく、思わず声を出しても、周囲に迷惑になるとは思われないでいられる「屋外展示」にのみあてはまるのかもしれない。しかしながら、最近のたとえば「子ども（の）博物館」\*xivや、ワークショップ形式での創作活動を取り入れた美術館活動、あるいは多様な体験的要素をもつサイエンスセンターなどでの活動をみると、来館者相互の社会的やりとりに関心が集まり、ひそひそ話ではなく、むしろ来館者どうしでの「話し」がより促進されることがよしとみられる傾向も指摘できる。

このように、展示を仲立ちとした、来館者相互の交流の場として博物館をとらえる視点は、今後ますます必要となり、「ものを見て語り合う」ことの社会的・文化的意味を理論的に考えていく上で重要な役割を担うのではないかと考える。

#### 4 節 展示意図伝達の検証のための方法

その展示で伝えたいことが、来園者に本当に伝わっているかどうかという、博物館来館者調査で検証する場合は、展示室の入口と出口で同じ項目の調査を同一の来館者に行ったり、インタビュー（対面・電話など）により、知りたい内容をあらかじめ設定し、そのことに関して評定していくという社会調査法を用いる。

しかし、上述のように、人々の展示解釈の多様性を知った上で、展示者側の意図との関

連を見るためには、「参与観察」や「非構造化面接」などが有利となる。前者の利点は、分析に必要な量的データを集めやすいという点であり、欠点は、当然調査者側が把握したいこと以外は編み目から落ちてしまうことである。逆に、後者の利点は、それぞれの来館者が自らの体験を語る中で、展示者側が気づかなかった展示利用のありかたを具体的に知ることができるということに代表され、その利用のあり方とあらかじめの展示意図との差を検討することにより、展示改革の方向への示唆が得られるという点である。しかし、「量」を集めることは困難で、かつ、調査協力をするという時点で、あらかじめ「展示に関心がある」対象者にしぼられる可能性も否めない。

本論では、意図伝達の検証に関しても、来園者相互の自然な「発話」に含まれた情報の出現頻度に注目することで、来園者の多様な展示利用における「展示意図伝達」の程度を知ることとする。また、従来のインタビュー法も採用し、発話には含まれなかったような来園者の意見もくみ上げて、総合的に伝達の程度を判断する。伝達の程度とは、新しい展示法を採用した展示と従来の展示との差異を比較するという、いわば対照実験のような方法で知ることとする。

## 5 節 来館者相互のコミュニケーションを具体的「発話」から捉える方法

### 5-1 「交わりコミュニケーションモデル」の創出

もともと、「コミュニケーション」ということばは、人と人の関係に限らず、自然と人間との対話という意味で使ったり、さらには動物の交信という意味で用いることがあるなど、その使われ方や意味するところはたいへんに広い。人と人の間に限ったにしても、言語を媒介とした知識交換のみを指したり、感情的交流を含める場合もある。このように、コミュニケーションの定義は様々だが、本論では博物館研究におけるコミュニケーションの捉え方を採用する。つまり、本論で言う「コミュニケーション」とは、主として「言語」（書きことば・話しことば）によるコミュニケーションおよび言語記号を補助的補完的に表す身振りや表情なども含めて、「言語的コミュニケーション」を意味することとする。なぜなら、博物館における展示は、多くの場合、「もの」とテキスト（ラベルや音声解説・シート）の組み合わせであり、また、展示を用いた教育的な活動も、「人」を介した言語的やりとりを多く含むものだからである。

さらに、本研究では展示を見ながらことばで語り合うことを「交わりコミュニケーション」と呼び、その交わりの展開を展示法と関連させて知ることとする。

こうした来館者相互・来園者相互の言語的コミュニケーションをとらえる上で、よりど

ころとなる理論的枠組みとして、筆者はまず、社会学で言うところの言語的コミュニケーション論に依拠したいと考える。尾関(1983)によれば、これまでは基本的に「二つのコミュニケーション観」の対立がみられるとされる。それは、「コミュニケーションを情報の伝達の意見合いの純化により、もっぱら手段的・道具的なものとし」、もうひとつは「交わり」的意味合いの独自の純化によって、もっぱら自己目的的なものとみている、ということである。むろん、どちらの側面も言語的コミュニケーションには備わるものであり、それが否定されているのではなく、尾関(1983, 同書)が重視するのは、コミュニケーションするという「行為」が生み出しつつあるもの、「行為」により生み出されたも「社会的事実」に注目するということである。

しかし、これらの社会的事実を動物展示法の関連させて把握する場合、発話をどのように分析していくことができるだろうか。また、「生きている動物」の展示という特殊性に関連して、どのような点が問題となるだろうか。

## 5-2 発話分析の方法

来園者相互の発話内容をどう分類して捉えるかだが、ひとつには、これまでの博物館来館者調査や、動物園における発話採集調査で用いられた採集方法とそれらのカテゴリーと、他方では社会学や認知心理学における会話調査で用いられる交わりとしての「対話」「発話」の質的分析のためのカテゴリーを参考にし、前者では交わされる情報の内容を、後者では、交わりの質をとらえることとする。

発話を逐次記録し、そののちに、あらかじめ設定されたカテゴリーにコメント(ひとまとまりの意味ある発話)ごとに評定をする。

そのカテゴリー別出現の割合を展示間比較することで、展示の諸要素と家族相互の「交わりコミュニケーション」の特徴を関連づける。展示間の出現割合比較は、基本的に $\chi^2$ 検定を用い、もし有意差があれば、何らかの展示の要素がその発話の出現に影響を与えた可能性があると考えられる。

## 5-3 展示動物との感情的交流をどう扱うか

ところで、動物という「展示物」との交流は、筆者の採用するこの「交わりコミュニケーション」にどう位置づけられるべきだろうか。筆者は、展示されている動物にながしかを「感じること」を、本論では、動物への具体的な声かけやまねをしてみせるなどの、明らかに観察からわかる行動と言語的なコミュニケーションにのみ限ることとする。とい

うのは、「ひとと動物の間の交流」という意味でのコミュニケーションは、上述の「自然と人間との対話」の範疇に入るコミュニケーションであり、筆者がこれから分析しようとする「展示を見ながらの人と人との言語を中心とした『交わりコミュニケーション』」を成立させる要件にはなっていない、表現された「ことば」を手がかりにコミュニケーション分析をすすめる際には、「心の中で起きているはずの動物との感情的交流」は外側に現れる言動や身振りにいったん置き換えるべきと思うからである。むしろ、感情的交流は、動物を見て感じた印象を語る、その語り口の特徴に表れるという立場をとる。動物との交流から感じ取ったことが、来園者相互の交わりとしてのコミュニケーションの成立要件になる可能性は大きい。来園者同士のあいだに、動物展示をいっしょに見ながらの交わりコミュニケーションを具体的に知ることにより、来園者理解がすすむと考える。

## 6節 年齢差を含んだ「交わりコミュニケーション」の分析の方法

動物園は、グループ（家族連れや大人に引率された幼児・小学生団体の子ども達の集団）での来園形態が最も多く、大人と子どもの組み合わせのグループが数多くみられること、したがって、年齢差のあるグループの成員間の社会的やりとりが特徴である。各人が注目する対象動物や、動物行動の解釈のしかた・表現内容に差異がみられるという調査結果も得られており（並木, 2000b）、その差異性により対話が生まれやすい可能性が示唆された。この「年齢差を考慮する」ことを含み、発話のやりとりをとらえることとする。

具体的には、同じ動物行動の映像をそれぞれの年齢群に見てもらい、その行動が「何をしているのか」「その時、動物はどのような気分にいるか」を想像して答えてもらう実験を行う。答え方は自由記述で、そこに含まれる共通のキーワードの出現率を年齢群間で比較し、その差異を年齢差のもたらす差異として定義する。その結果をもとに、実際の動物展示前での発話の特徴を、年齢差と関連させて考察する。

## 7節 動物展示のありかたへの提言と来園者理解の新しい枠組みの提案

動物園の展示法改革が、来園者に「新しい視覚体験を用意する」という目的で行われていることを考えると、その「新しさ」が来園者の主体的な展示利用によって本当に生まれるために、よりのぞまれる展示デザインや諸機能を提案することが求められる。

展示意図伝達の検証と交わりコミュニケーションの諸特徴を年齢差も考慮して行うという「観覧体験の理解」に加え、本研究では重要な要素として「展示解説者」の役割についても言及する。

その点を考える上で、第一に、年齢差考察のための実験において、動物園展示者側の人々を「飼育エキスパート群」として同様の手法で動物行動の解釈のしかたを調査する。これは、展示解説に携わる者の多くが「飼育係」である場合が多いからであり、もし展示者側が来園者側の人々に比べて動物行動の理解や表現のしかたに違いがあるとしたなら、来園者に展示解説をするにあたり、その違いを自覚しておく必要があるからである。

第二に、日頃、展示解説にあたっている「ボランティア解説員」が、実際に新しい展示法に対してどのような意見を持ち、来園者との関わりにおいてどのような工夫をしているのかをインタビューにより知り、来園者の主体的な観覧体験を生み出す上でのこうした解説員の役割の可能性に触れる。

そして最後に、これらの諸調査や実験の結果をもとに、望ましい展示デザインの方向と、家族連れ来園者の「観覧体験の理解のための新しい枠組み」を提案する。

## 8 節 本研究の対象者と調査地および調査者

### 8-1 展示意図伝達の検証と展示観覧における「交わりコミュニケーション」 調査

動物園来園者で最も多い層である、幼児や子どもを含む家族連れ来園者を対象とする。幼児とは、発話が可能な2歳くらいから就学前までをさし、子どもとは、小学校3～4年生（9～10歳くらい）までをさす。5年生以上になると、子ども同士のグループによる利用も多くなり、「家族連れ」ではあまり見かけなくなるからである。この年齢層の子どもを含む家族連れをターゲットにすることにより、最も多い利用者にとっての新しい動物展示法の活用を考えていくことができる。

対象地は、現在展示改革が著しく進んでいる類人猿展示として、上野動物園の「ゴリラの森」（生態展示）と多摩動物公園の「新チンパンジー村」である。前者は、イメージョン展示法の影響を受け、後者は行動学的展示法のアイデアを採用している。どちらも、比較対照地として、ゴリラ：旧来の展示法として千葉市動物公園のゴリラ展示（オープン展示）と、チンパンジー：多摩動物公園の「旧チンパンジー村」（オープン展示）をおく。

### 8-2 動物行動解釈の年齢差と「展示者側」の解釈の違いの調査

動物行動の理解についての発達変化及び、飼育エキスパート（展示者側）群の動物行動の理解の特徴を知るために、①幼児（年長児） ②小学3年生 ③高校生 ④大人（子どもを持つ親） ⑤飼育係 の5群を対象とする。

### 8-3 展示解説者インタビュー調査

上野動物園を活動の場としている「東京都動物園ボランティアーズ（略称 TZV）」のメンバーのうち、新しい類人猿展示施設（ゴリラの森）での解説を担当している者を対象とする。

## 9 節 本論の構成

本論の各章の構成は下記のとおりで、その連関は、図 1 のとおりである。

### 序章（リサーチクエスション）

展示者側の展示意図伝達の検証

家族連れ相互の展示観覧におけるコミュニケーション分析

コミュニケーションにおける成員間の年齢差

展示解説者の役割

### 第 I 部：先行研究と本研究の研究方略

第 1 章 博物館研究におけるコミュニケーション論

第 2 章 動物園における展示の発展過程と日本の新しい類人猿展示

第 3 章 家族での学び

第 4 章 家族連れ来園者の動物展示観覧の体験を捉える方法

### 第 II 部：調査本研究の対象選択の根拠と調査方法・調査地および調査対象

第 5 章 調査 1 の調査地詳細と調査対象者および方法

第 6 章 調査 1 の 1 展示意図伝達の効果の検証

第 7 章 調査 1 の 2 「交わりコミュニケーション」の展示間比較

第 8 章 調査 2 動物の行動の見方と表現の発達的变化

第 9 章 調査 3 来園者と展示解説者双方による新展示法に対する評価

### 第 III 部 考察と展望

第 10 章 考察：親子連れ来園者の「類人猿新展示観覧体験」を理解し  
動物展示と動物解説のありかたを考える

第 11 章 来園者の能動的視覚を生み出せる動物展示のあり方への提言

終章 結論と課題



---

\*i 世界自然保護連合 (IUCN) の世界保全戦略が提起されたのを受けて、世界の動物園園長会議 (IUDZG) も世界動物園保全戦略を発表したが、動物園も地球規模で多様性保全に積極的に関わるべきだという態度を明らかにし、将来は保全活動の実践と情報のセンターとして機能すべきだという将来像も提起し、各動物園にその提言を行っている。絶滅のおそれがある種を動物園で繁殖させて将来野生復帰を実践すべく、遺伝的管理と復帰のためのトレーニングを動物園として行うことを呼びかけたものとなっている。(IUDZG/SSC, 1993, "The World Zoo Conservation Strategy")

\*ii 動物園の実践に引き寄せてこの概念を生かすとすれば、歴史的社会的存在としての「動物園」が、諸個人の発達に影響を与えると同時に、諸個人が自由に動物園を使いこなしている中に、新しい「見方」がとくに子どもや若い世代に生まれているという見方をとる、ということである。

\*iii 文部科学省の「親しむ博物館づくり事業」による。この事業は同省の生涯学習局「全国子どもプラン（3ヶ年）」の一事業として位置づけられている。

\*iv 「Hands-on exhibits」の日本語訳。直接的な意味は、「Hands-off」（お手を触れないでください）の逆で、「どうぞご自由に触れてみてください」であるが、展示手法の一つとして、70年代後半より主にアメリカの科学館や子ども博物館の「積極的に触れて確かめることのできる展示」として採用された。

\*v 「教える」ことの手続き主義の批判や、人と人が出会ってコミュニケーションを行うプロセス自体として知的プロセスを理解しようとする立場が示されている。日々創り上げられる具体的で日常的な対話のなかに、知の営みを見ようとしている。

\*vi 1960年第11回 UNESCO 総会での勧告による。文化庁（編）1970、「文化財保護提要」p.1402-1405 参照。本勧告は、「博物館をあらゆる人に開放する有効な方法に関する勧告」であり、その一文に目的が示されている。本勧告にも動物園と水族館は他施設と並んで明記されている。

\*vii ICOM（国際博物館会議）（1989）における定義

\*viii 川嶋-バルトラン,2000,キャプションと来館者--展示メディアにおける文字情報の評価  
ミュージアムデータ No.51 : 1-6

\*ix ここで引用されたヴィゴツキーの著書は、1930年の「心理学における道具主義的方法」である。

\*x アメリカ・ウィスコンシン大学の Screven C.G.が発足させた研究所

\*xi 1991年に設立。母体は、アメリカ・ジャクソンビル州立大学の Bitgood S.らによる「The center for social design」.

\*xii 構成主義は、その源をピアジェのような個人の認識の枠組みの発達の变化を重視する立場と、デューイやヴィゴツキーらを源とする、社会からの働きかけや人々の相互のやりとりを重視する立場に大きく分かれる。その後、後者はワーチ、ガーゲンらの社会構成主義へと発展している。

\*xiii たとえば、ガーゲン（1998）「もう一つの社会心理学」、原著は1994 あるいは、マクナミーとガーゲン（1997）「ナラティブ・セラピー」をあげることができる。著者らは、近代

---

主義に特有の個人主義を克服して、何かを物語ることにより構成される「関係性」、および、そこにうまれる「社会的な知」に注目している。

\*xiv Children's Museum を「子ども博物館」と呼ぶ場合と「子どもの博物館」と呼ぶ場合とがある。